

## 2. 身近な天気～キャスターの目を通して～

(財)日本気象協会北海道支社 石 掛 貴 人

### 1. はじめに

天気はよく挨拶の代わりに使われます。みなさん関心があるし、しかも私生活を干渉するわけでもなく無難だからでしょう。「きょうは暑いですね!」「午後から雨が降るそうですよ。」など、道でばったり会ったご婦人が立ち話する光景はよく見かけます。また、しばらく連絡を取っていなかった友人との近況報告にも天気の話は使われたりします。「こっちは暑いけど、そっちはどう?」などとメールが来たり…。

今回の講演では、天気キャスターの目を通して私たちの身近な天気について理解を深めていただければと思い企画いたしました。前半ではキャスターの生活やTVの裏話など普段なかなか伝えられないことを中心に、また天気予報の自由化について感じることもお話したいと思います。後半は、生活に身近な天気をいくつか例を挙げてお話し致します。

### 2. キャスターとしての成長

キャスターになったきっかけは「天気が好き」ということもありましたが、やはり気象予報士の資格を取れたことが大きいと思います。高校や大学受験の勉強は「しなくてはいけない」「やらされている」といった受け身でしたが、予報士の勉強は好きなことだけあって一生懸命でした。おかげで、第一回(1994年8月)の気象予報士の試験で合格することができ、大学で学んでいることと違う職種ではありましたが、翌年の就職活動では気象関係への会社訪問もなんとかうまくいきました。

1996年(平成8年)に気象協会関西支社に採用になり、日勤や夜勤といった交替勤務(ラジオの解説や放送局向けの原稿作成、局地予報など含む)を1年ほど担当しました。関西は土地柄もあって個性あふれるキャスター(解説者)が多く、解説の基本中の基本「伝える」ことをここで学ぶことができ感謝しています。翌1997年4月には若葉マークがようやく取れかかった頃ではありましたが、たまたまTVの解説の機会が訪れました。NHK大阪放送局のローカル放送「おはよう関西」のオーディションが行われ、採用が決まったのです。それから2000年3月までの3年間、近畿地方の朝の天気予報を担当させていただきました。初めての放送では、出ていない注意報を言ってしまうたり、緊張のあまり話す内容を忘れてしまったり、放送終了時間を間違えて話の途中で番組が終わってしまったり…。失敗はこのほかにもたくさんあり、関西の方々には迷惑をかけてしまいました。3年間続けることができたのは局の方が辛抱強く使って下さったのと、多くの方の励ましのおかげです。最後の1年は「天気予報は楽しんで、喜んでもらってなんぼ、サービス業」と感じ、都会で見つける季節の変化を大阪城公園を探し歩いて取り上げました。

降板後は情報伝達システムの構築やメンテナンス、予測業務(特定の事業所向け)をした後、2001年9月に現在の気象協会北海道支社に異動になりました。出身が九州なので、雪は降ることがあっても平野部ではほとんど積もらない地域です。関西でも都心では積もることはめったにありません。大阪には5年間



いましたが、記憶に残っている雪は5 cm積もった1回だけです。「こんなことで天気の手伝いとしてどうなのだろう…」とずっと思っていたところに異動の話があり、新しい世界に飛び出すことにしました。大阪では真夏の厳しい暑さが続いている8月末に、荷物をまとめて札幌にやってきましたが、秋の涼しい風に全身を包まれ、何より夜がぐっすり眠れることが感激でした。ただ、その後の秋から冬への気温低下は強烈で、関西仕様の汗腺だらけの体には堪えませんでした。

そんな中、移り住んで約半年経った翌年2月にSTV「どさんこサンデー」に出演させていただく機会を得ました。まだ、初めての冬を経験している最中で、雪がさらさらで積もるものであること、吹雪のすごさ、厳冬期の痛いくらいの冷え込みなど…実感し始めた頃で、出演させていただきながら勉強させてもらっていました。月1回程度と出番は少ないですが、季節感の違い、雪や寒さの特有の表現方法など、1回1回解説のギャップを埋める作業を自分の中で繰り返し、放送に臨んでいました。そして約1年後の2003年4月からは同局の「あさ6生ワイド」のキャスターも合わせ持つことになり、今に至っています。

早朝（真夜中？）2時起きが続いていますが、寝坊する夢ももう見ることもなくなり、夜は熟睡できることが多くなりました。就寝は20時頃です。幼稚園の子どもさんより早いかも知れませんね。でも、よい放送には体力と気力が欠かせません。

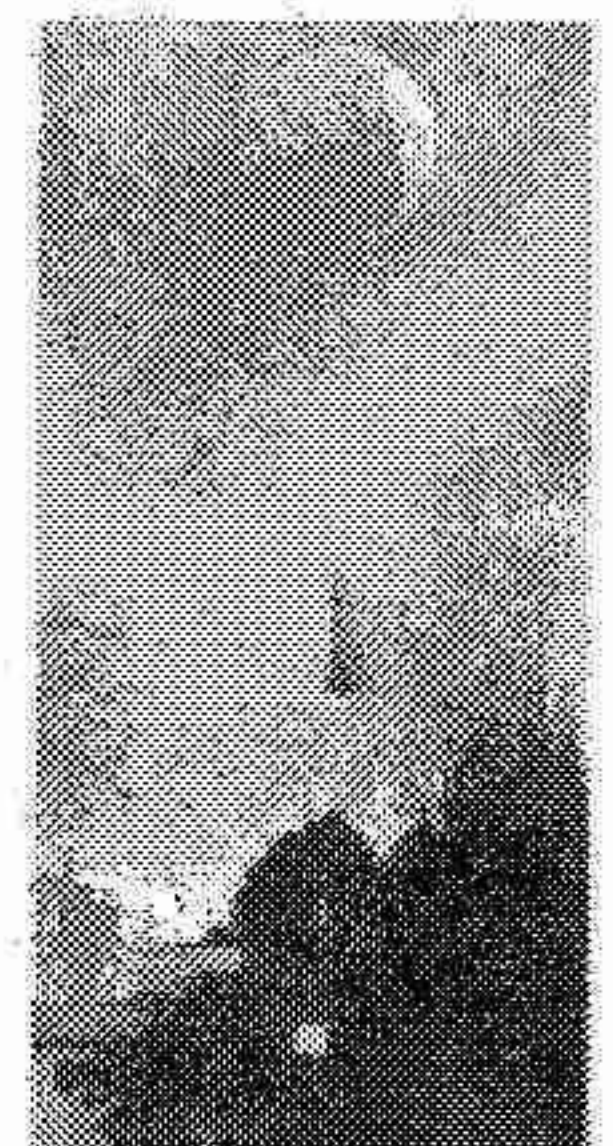
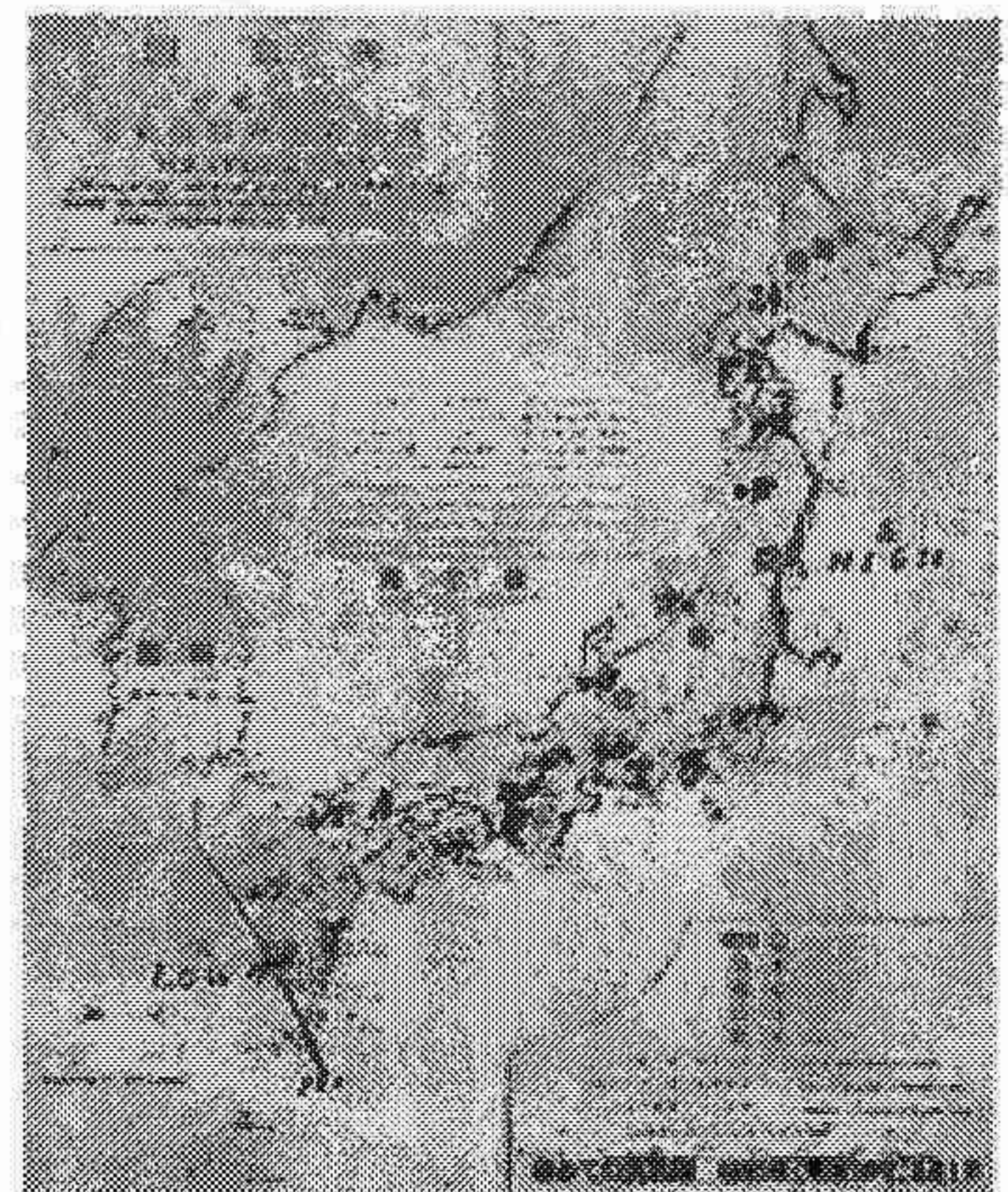
### 3. 天気予報の歴史と自由化

1883年（明治16年）2月にE・クニッピングというドイツ人が日本で初めての地上天気図を作りました（放送で使用したため一部に加工あり）。これはクニッピングが海に囲まれた日本には暴風警報が必要だという建白書を明治政府に差し出し、採用されたからです。東京気象台が初めて暴風警報を出したのは同年5月で、天気図には発達中の低気圧が四国沖と島根沖に描かれていました。「2つ玉低気圧」で嵐の前兆であり、最初の暴風警報は見事に成功しました。

翌1884年5月9日以降は一日3回天気図が作られるようになり、同年6月1日に日本で初めての天気予報が発表されました。クニッピングが書いた英文の予報は、日本語に翻訳され東京の派出所に掲示されました。「全国一般風ノ向キハ定リナシ。天気は変リ易シ、但シ雨天勝チ」という予報でした。クニッピングが1891年に退職した後は日本人が予報を出すようになり、今日まで100年以上に渡って続いています。20世紀に入り、天気図の内容や見方には大気科学が取り入れられて発展し、低気圧の発生から消滅までのプロセスがモデル化されました。温暖前線、寒冷前線と言った言葉が生まれたのは1922年頃で、日本の天気図に導入されたのは第二次大戦後の1948年前後です。

1950年頃からは、上空約30キロメートルまでの高層天気図が作られ、大気の立体構造から天気予報を組み立てられるようになり、進歩しました。さらに、気象レーダーが大阪（1953年）や富士山頂（1965年）などに設置され、細かな降水分布や強度が観測されるようになり、1974年には全国約1300カ所に展開されたアメダス（自動有線ロボット気象計）が運用を開始し、局地的な降水量、風、気温、日照といったデータをリアルタイム感覚で見ることができるようになりました。そして、1977年に打ち上げられた静止気象衛星“ひまわり”は予報官を悩ませた台風や前線の位置が正確に分かるようになり、天気予報の精度は一段と向上しました。

また、コンピューターによる数値予報は、日本では1959年から始まりましたが、最初は予測精度が悪かったです。予報官の評価が変わったのは1980年頃からです。明日の天気予報

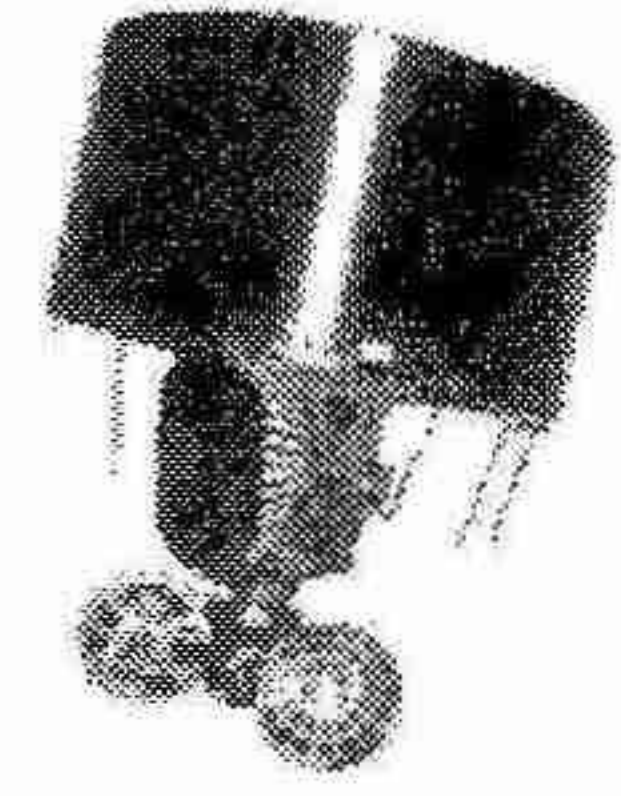




的中率は1957年の約78%から1995年の約83%に上昇し、台風中心位置の24時予想の誤差は、1985年の約240キロメートルから1995年の約180キロメートルに縮まりました。

1990年代は予報自由化の流れが加速しました。気象庁は1993年に気象業務法を一部改正し、1994年には気象予報士制度が始まり、民間でも自由に局地の天気予報を発表できるようになりました。さらに2000年からは局地予報だけでなく広域の天気予報（府県予報）も自由化され、2001年には1カ月予報も発表できるようになっています。

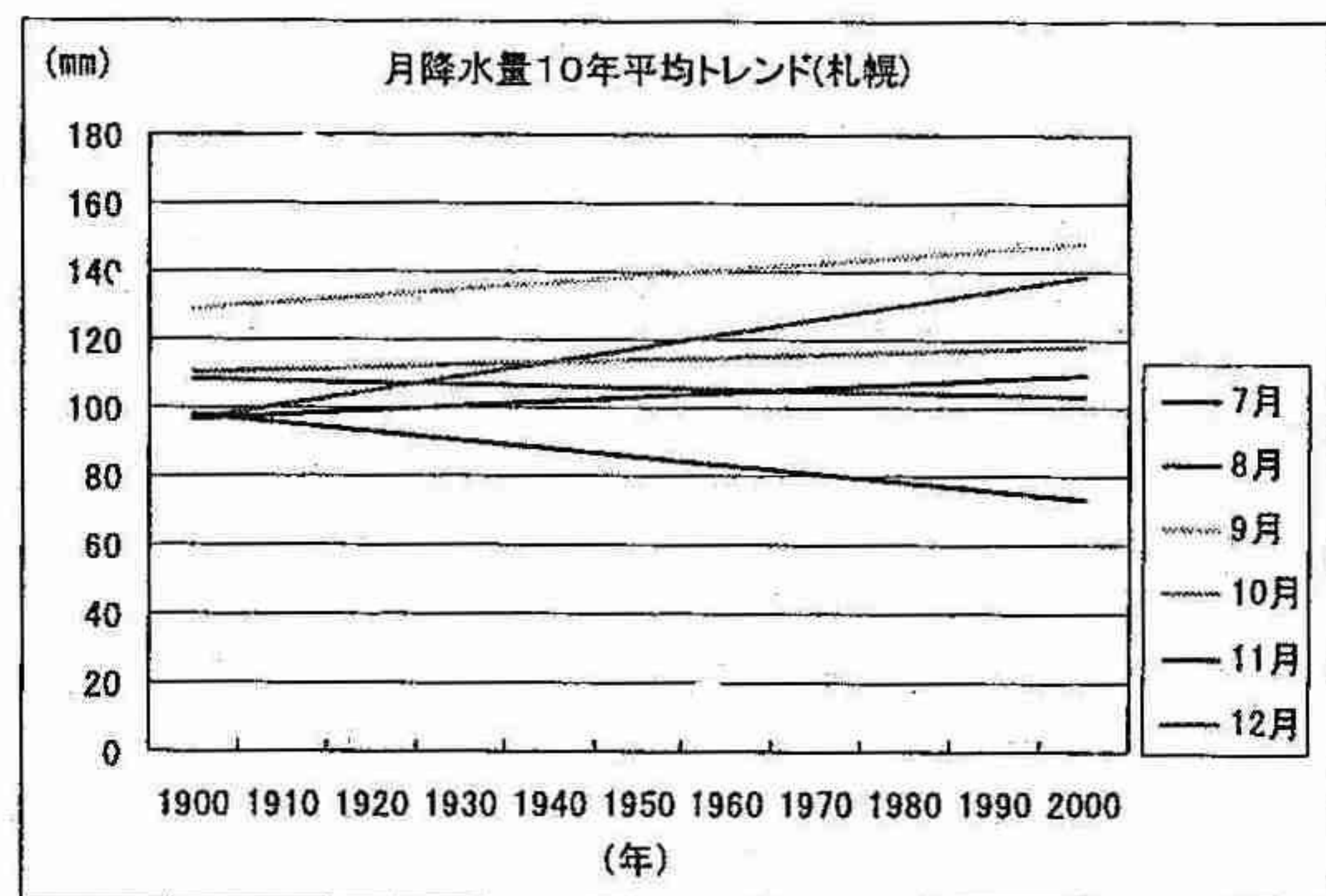
2002年には北海道で初めての気象予報士による100%独自予報が始まり（STVどさんこサンデー）、2004年4月にはSTVで放送される全ての天気予報が气象台の予報を使わない独自予報へと変わっています。



## 4. 生活に身近な天気

### 〈北海道にも梅雨出現…?〉

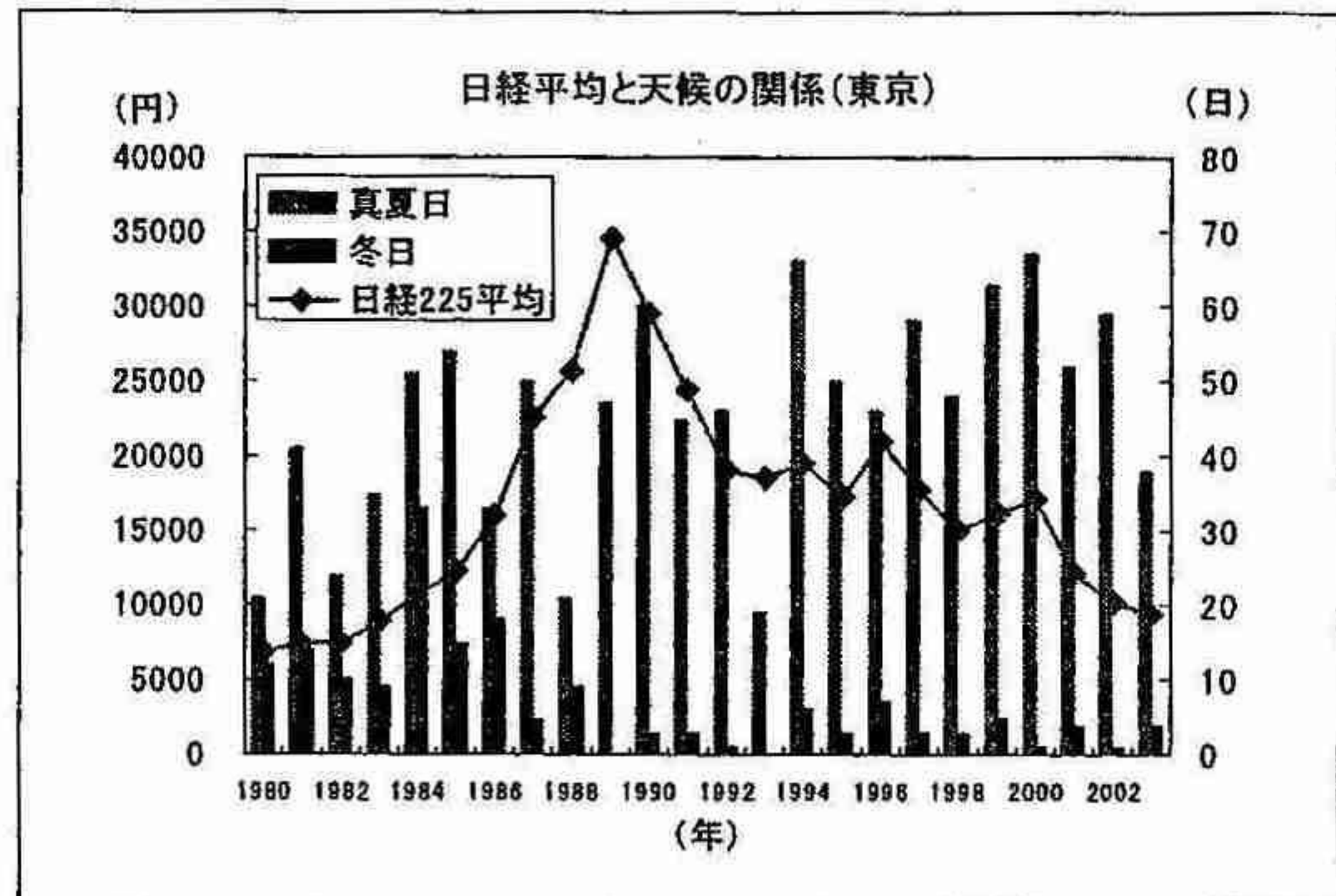
札幌では過去100年で約2度平均気温が上昇しており、年間降水量は約25%増加しています。特に降水量に関しては1月～3月、8月の増加が大きく影響しており、年間の最深積雪量に大きな変化がないことから冬季の増加は湿り雪や雨によるものと考えられます。また、夏季については本州方面から北上した梅雨前線の影響を受ける傾向が強まっています。



### 〈経済と天候〉

天気は私たちの生活だけでなく、経済にもさまざまな影響を与えます。長雨は農作物の生育を遅らせたり、冷夏は日照や高温を必要とする穀類を不作にし、クーラーや夏物衣料の売れ行きを落ち込ませます。逆に暑い夏はビールやジュースなど飲料の売れ行きを伸ばし、経済を押し上げる効果があります。

実際に過去の気象データと日経平均株価を付き合わせてみると、景気が拡大している時期はメリハリの利いた季節変化（夏は暑く、冬は寒い）であることが多く、景気が後退している時は冷夏・暖冬傾向が強いことがわかります。バブル景気の株価のピーク（1989年末～1990年年初）時は暖冬で東京では一日も冬日がありませんでした。また前年は冷夏に見舞われ、これまで拡大の一途とたどっていた経済の足をひっぱった、あるいは本来あるべき株価へ戻す方向へ気象要素が働いたと言えそうです。



もちろん、経済動向の全てを天候が決めるわけではありませんが、円高不況の1986年や平成不況のどん底1993年は冷夏、ITバブルの2000年前後は暑い夏であり、バブル崩壊後の株価が底値をつけた2003年は冷夏でした。



〈マラソンと天候〉

今年オリンピックの年ということもあり、スポーツがいつも以上に注目を浴びることでしょう。オリンピックというとマラソンを思い浮かべる方も多いと思います。ここでは毎回開催地が変わるオリンピックのデータではなく、北海道マラソンの記録を使って天候との兼ね合いを見てみたいと思います。

夏のマラソンは気象条件が厳しく、レース時の平均気温は25度前後あるため、熱中症によるけいれんや疲労、失神など高温が原因による傷害が北海道マラソン全傷害の約半分を占めます。フルマラソンでは、体から1～3リットルの水分が失われるため、水分の補給は不可欠です。また、塩分も汗と一緒に体外に排出されるので、こまめに水のほかにスポーツドリンク等も摂取しなければいけません。一般的に体重の3%の水分が失われると、運動能力や体温調整能力が低下するといわれています。夏のマラソンは記録よりも完走重視の姿勢が大事だと思います。

過去の大会結果を見ても、同マラソンで最も速く走った第12回大会（1998年）アンベッセ・トロッサ選手（エチオピア）の2時間10分13秒という記録は気温20度、曇りという好条件の中で出されています。また、この1998年以降で、上位5人（男子）のデータを平均した値で比べてみても、20～25度くらいであれば2時間13～15分程度の記録が出ていますが、30度になると2時間17～18分までタイムが落ちているのがわかります。一般ランナーであれば、暑さ対策をしっかりと行い、無理しないことが大切だと思います。

	第12回	第13回	第14回	第15回	第16回	第17回
開催年	1998	1999	2000	2001	2002	2003
開催日	8月30日	8月29日	8月27日	8月26日	8月25日	8月31日
天気	曇り	晴れ	晴れ	曇り	曇り	曇り
気温(°C)	20	25	30	30	21	26
平均タイム (上位5人)	2時間14分04秒	2時間13分02秒	2時間18分02秒	2時間17分05秒	2時間15分32秒	2時間15分00秒